



Title	現代短歌における記号とレトリック「新鋭短歌シリーズ」を対象に
Author(s)	権田, 彩良
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 95-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102483
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代短歌における記号とレトリック —「新鋭短歌シリーズ」を対象に—

権田彩良

1. はじめに

本稿では、現代短歌の歌集シリーズ「新鋭短歌シリーズ」に収録された短歌作品において記号がどのように使用され、どのようなレトリック効果をもたらしているのか分析することを試みる。日本語には厳格な正書法が確立されていないため多様な表記が許容され、特に創作の場面では新奇性のある文字や記号の使用が見られる。表記の多様化は短歌においても同様であり、大野(2008)は記号の多用を現代短歌の修辞の特徴のひとつに挙げている¹。記号が用いられた短歌においては視覚情報も韻律と同様に短歌を構成する重要な要素であり、韻律には反映されない場合がある記号の使用が特定の解釈の根拠となる。そこで本稿は、「新鋭短歌シリーズ」中の記号が用いられた短歌作品からいくつかを取り上げ、そこで使用された記号がもたらすレトリック効果を明らかにしたい。

2. 現代短歌の表記法

記号の使用は現代短歌の修辞の特徴のひとつである(大野 2008)が、それ以前の短歌においても記号の使用は見られ、表現技法のひとつとして考えられている。『短歌研究』第 38 巻第 8 号(1981)では「短歌表現の「かたち」—表記の工夫をふりかえる」いう特集が組まれ、表記の工夫のひとつとして記号の使用が取り上げられている。そこでは山括弧やダッシュの効果が論じられたほか、三点リーダーや感嘆符や疑問符を使用した短歌が紹介されている(三枝 1981)。『短歌人』第 57 巻第 5 号(1995)に掲載された特集「短歌表記法入門」には、実験的に記号を使用した短歌が掲載された(梶・水城 1995)。そのほか松平(2005)は、「分かち書きや、記号符「」『』()、。！？などの使用は、まずもって視覚に訴えかけて来る要素が高い」(松平 2005 : 137)と記号を使用することの効果を述べている。歌人の加藤治郎による『短歌レトリック入門』(2005)では、「パーレン」と「表記的喩²」が項目として立てられている。

短歌や言語表現に関する辞典には、記号のなかでも特に句読点や一字空き(空白)についての説明が見られる。『日本語文章・文体・表現事典(新装版)』(2011)は短歌における句読点について「一字あきとは違った間合いを持たせたいとき、「、」「。」を挿入する手法がある。視覚的な効果も含めた感覚的なもの」、一字空きについて「一気に読み下すのではなく一拍おくような読み方を求める場合に用いる。漢字が続いて読みにくいとき、意味的に離したいときにも有効」と記述している。『岩波現代短歌辞典』(1999)は、「句読点」の項目で、「韻と律に清新で複雑な効果をもたらしたり、意外な効果を促すために用いられる」こと、呼吸法を明示すること、空白も句読点として扱われることに言及している。

以上のように、短歌において記号の使用は表現効果をねらった特別な表記法であるとみなされている。しかし短歌雑誌や辞典の記述は限定的であり、記号の使用の実態やそのレトリック効果を捉えるために十分なものであるとは言えない。本稿では、現代短歌の多様な表記の試みを観察し、そのレトリック効果を明らかにすることを目指す。

3. 分析対象と方法

3.1 分析対象

本稿で引用する短歌作品は、すべて「新鋭短歌シリーズ」(書肆侃侃房)に収録されたものである。このシリーズは主に新人歌人の第一歌集からなり、2013 年から現在までに 60 冊が刊行され、なかには 2020 年代に活躍している歌人の第一歌集も含まれている(高良 2024)。

分析の対象となるのは、記号が使用されている短歌である。本稿における記号は、漢字、ひら

¹ 大野(2008)は、修辞技法や社会との関係が従来の短歌と異なっていることと俵万智の登場から、1985 年以降を現代短歌として扱っている。

² 加藤による用語であり、ある文字や記号に対応する音声や意味ではなく、その形のみが関与する表現を指す。加藤は例として「𪛗𪛗𪛗𪛗と不思議なものを復路にて感じつづけてゐる春である」(荻原裕幸)を挙げ、この作品の「𪛗」はその音や意味ではなく、見慣れない文字による奇妙な感覚を伝えようとしていると述べている。

がな、カタカナ、数字、アルファベット以外のものを指す。空白が句読点として機能するという『岩波現代短歌辞典』（1999）の記述から、空白も記号として扱い、本稿の分析対象とみなす。例外として、4.2 節で扱う（11）のように、視覚に訴えることで特定の内容を伝達しようとするアルファベット等は記号として扱う。本稿におけるそれぞれの記号の呼称は『句読点、記号・符号活用辞典。』（2007）の見出し語に準拠し、それぞれの記号の慣習的な用法についても同辞典を参照した。

3.2 分析方法

記号が使用されている短歌を、その短歌が属している連作のコンテキストに基づいて解釈した。解釈においては、それぞれの短歌作品における語り手を作者と直接結びつけず一律に「語り手」と呼び、語り手以外の人物や事物については短歌中の表現を引用した。分析にあたり、筆者が必要と判断した場合は短歌の表記を一部改変し、もとの短歌と表記を改変した短歌の解釈の比較を行った。表記の改変による比較は、もとの短歌がその表記を採用したこと必然性、ひいては記号の使用がもたらすレトリック効果を明らかにするための試みである。

それぞれの短歌を観察し、記号の使用がもたらすレトリックを、記号の用法に基づくレトリック（4.1 にて詳述）、記号の形に基づくレトリック（4.2 にて詳述）に大別した。記号の用法に基づくレトリックには、慣習を活かしたレトリック（4.1.1 にて詳述）、慣習から逸脱することによるレトリック（4.1.2 にて詳述）の下位分類を設けた。

4. 「新鋭短歌シリーズ」における記号の使用

4.1 記号の用法に基づくレトリック

第2 節で確認したように、短歌において記号の使用はレトリックとみなされている。記号が用いられた短歌作品のなかには、その記号が慣習的な用法で使われたものだけでなく、慣習的な用法とは異なる使われ方をしているものも見られる。本節では、記号使用の慣習を活かしたレトリックと記号使用の慣習からの逸脱によるレトリックを分析する。

4.1.1 慣習を活かしたレトリック

短歌においては記号の使用が特別な表現技法として扱われレトリックとして機能するため、ある記号が短歌に用いられたとき、その用法が慣習的なものであっても記号が解釈に影響を及ぼす。

- (1) 曲がり道・真夏の薄暮・待ちぼうけ 汗がひんやりひいてゆくまで (小野田光)
(1') 曲がり道 真夏の薄暮 待ちぼうけ 汗がひんやりひいてゆくまで (筆者による改変)

(1) では、語り手が「君」を待つ様子が詠まれている³。この短歌の表記で特徴的なのは、五七五の部分で中点で区切られていることである。中点は語と語の区切りを明瞭にするために使用され、中点で区切られた語はしばしば並列の関係にある。歌集では縦書きで配置された短歌を上から下へ読み下し、上から下へ読んでいくにつれ情報が増え、読者が思い描く情景に新たな要素が追加されていく。中点の代わりに空白を使用した(1')では、語り手が曲がり道にいて、それは真夏の薄暮の時間帯であり、語り手は約束したはずの「君」を長く待っている、という情報が順に追加される。それは、この短歌の場面を映しているカメラが空白ごと移動して、曲がり道、真夏の薄暮、待ちぼうけしている語り手を順に映しているようなものである。それと比較して(1)は、中点の使用によって上の句を構成する3つの要素が並列され、カメラが移動しているというよりも、1台のカメラが曲がり角と真夏の薄暮と待ちぼうけしている語り手を定点で収めているかのような効果を挙げている。

- (2) 姉弟の親権は母／愛犬の親権は父 おのおの暮らす (水野葵以)

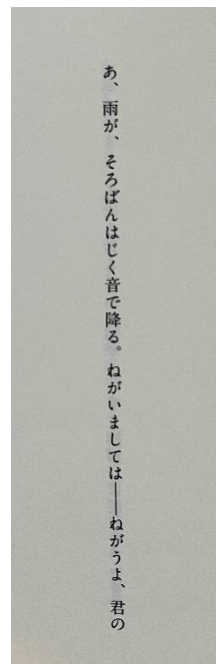
³ この短歌が収録された連作「遺影でもいい」では、(1)の次に「君の愚痴に頷きながら角砂糖をスプーンに溶かし占っている」という短歌が置かれている。連作はひとつのまとまりであるため、(1)での語り手はこの短歌に登場する「君」を待っていると解釈するのが自然である。

「親権」という語から読み取れるように、この短歌は語り手の両親の離婚を詠んでいる⁴。(2)に用いられているスラッシュには、2つのことばを対になっているものあるいは関連するものとして示す用法がある。「姉弟の親権は母」と「愛犬の親権は父」は平行法が用いられた表現であることから、この短歌におけるスラッシュは上述の用法であると考えられる。平行法の部分に着目すると、人間である「姉弟」に対して非人間である「愛犬」、女性である「母」に対して男性である「父」と、対をなす語が配置されている。そのなかで非人間である「愛犬」を引き取る権利に対しても人間と同じ「親権」という表現が用いられることに、「愛犬」と呼ばれる飼い犬への愛情と表現上のおかしみを感じられる。(2)のスラッシュの使用は、対になるものを表すレトリックである平行法を視覚の面でも補強している。

(3) あ、雨が、そろばんはじく音で降る。ねがいましては——ねがうよ、君の

(蒼井杏)

そろばんを弾く音を雨の音と表現している(3)には、句読点とダッシュが使用されている。初句は「あ、」の読点が韻律を整え、「あ、雨が」で5音となっている。上の句の最後の句点が意味上の区切れを示し、視覚の面では句読点の形が雨粒のようである。ダッシュは句読点とは異なる間を生み出すほか、「ねがいましては」というそろばんの合図から「ねがい」という語を取り出した語り手が「君」のことを連想し、「君」の何か、例えば幸せを願うという心情を導いている。さらに、歌集ではこの短歌は縦書きされているため(画像1)、ダッシュは雨粒が空から落ちる軌道のようにも見え、そろばんを弾く音から雨が降る様子を連想するという上の句の内容とも響きあっている。また、この短歌におけるダッシュの使用は、4.2で論じる記号の形に基づいたレトリックにも深く関わっている。



【画像1】蒼井(2016) p.35 より

(4) 【リコン】 おとなポケモン どくタイプ ひっさつわざ は はかいこうせん

(水野葵以)

(4)には、項目・見出しなどの表記に用いる記号である隅付き括弧が用いられている。「ポケモン」「タイプ」という語の使用と分ち書きの採用から、この短歌は「ポケモンずかん」⁵の様式を踏襲しており、「【リコン】」以下は「リコン」の説明であると分かる。記号のほかはひらがなとカタカナのみで表記されていることから、語り手はまだ幼いことがうかがえる。「どくタイプ」や「はかいこうせん」という表現には、両親の離婚は自身の心を蝕むものであるという態度や、離婚によって今まで共に暮らしてきた家族がばらばらになり、自身のアイデンティティが揺らぐことへの衝撃が表れている。この歌集を監修した歌人の東は、解説でこの短歌を「技巧的かつ痛切な客観化短歌である」(p.136)と評している。東の指摘の通り、記号を用いた「ポケモンずかん」の形式の踏襲によって、両親の離婚という生活を一変させる出来事を少しでもポップに見せようとする

⁴ (2)は連作「三人家族」のうちの一首であり、この連作は家族をテーマにしている。

⁵ 「ポケットモンスター」シリーズに登場するポケモンの情報を見ることができる。各ポケモンの説明は、「両頬には 電気を 溜めこむ 袋がある。」のように分ち書きで表記されている。

(参考:「ポケモンずかん ピカチュウ」<https://zukan.pokemon.co.jp/detail/0025>)

る語り手の健気さ、あるいは両親の離婚はフィクションのように現実味がないことが強調されている。

4.1.2 慣習からの逸脱によるレトリック

4.1.1 節では、それぞれの記号の慣習的な用法に基づいて記号がレトリック効果を挙げている短歌作品を扱った。次いで、記号を本来の用法から逸脱して使用することによるレトリック効果を検討する。

(5) 残念でした！！わたし、わたしはしあわせです！！！！！！！！道にゴミとかあったら拾うし (上坂あゆ美)

(5) では感嘆符が連続して使用されている。『句読点、記号・符号活用辞典。』には、感嘆符、二重感嘆符、三重感嘆符までが掲載されており、感嘆符を4つ以上並べて使うことは慣習的な感嘆符の使用からの逸脱であると考えられる。連作「新堀ギターを探してごらん」で、(5) の2つ前には「水商売なんかしやがってと金持ちのあの子に言われてからの人生」という短歌が置かれている。それを踏まえると、「残念でした！！」は、「金持ちのあの子」に象徴されるような語り手を蔑みあるいは不幸な存在であると決めつける人々への反発が感じられる表現である。三重感嘆符は感嘆符の強調であり、また慣習的な感嘆符使用のなかでは感嘆符の数が最も多いことから、語り手の反発心が強調されていることが分かる。続く「わたしはしあわせです！！！！！！！！」には、9つの感嘆符が連続で使用され、感嘆符の数が増えるほど強調の度合いも増すと考えると、「残念でした！！」よりも「わたしはしあわせです！！！！！！！！」がこの短歌の主題であることが読み取れる。感嘆符の多用は、表現に込められた思いの強さを視覚的に表すほか、音声的な宣言の力強さも表現している。本稿で取り上げることはできないが、「記号短歌」と呼ばれる作品に連続して感嘆符を用いた短歌が見られることをここで指摘しておく⁶。

(6) 「それからは「夢のなかを」「生きている」「寝ても」「醒めても」「夢の中」 (中山俊一)

(6') 「それからは「夢のなかを」「生きている」「寝ても」「醒めても」「夢の中」A) B) C) D) E) (筆者による改変)

通常、鉤括弧は「」を一組として用いられる。(6) は発話の始まりを示す「が6つ使われているものの、発話の終わりを示す」は1つしかない。慣習的な使用に則って鉤括弧を補うと、この作品は(6') の一部を抜き出したものであると想像される。(6') では鉤括弧の使用が「寝ても醒めても夢の中」という表現と深く関連し、語り手が夢の中でも寝ていて、その夢の中の語り手もまた寝ている、という入れ子の構造を効果的に表現している。(6) は(6') の一部であると解釈したとき、「が1つしかなく表現に断絶があることによって、夢の中で意識がはっきりせず、その先が分からない様子が表されている。鉤括弧によって韻律が五・六・五・三・四・五と細かく区切られていること、「生きている」と「夢の中」は字足らずであることから、ぼんやりとした意識のなかで断片的な映像が次々に浮かび上がっている様子が想起される。あるいは、「のひとつひとつが」に個別に対応しているとも考えることもできる。このとき、この作品では「それからは夢のなかを生きている寝ても醒めても夢の中」、「夢のなかを生きている寝ても醒めても夢の中」、「生きている寝ても醒めても夢の中」、「寝ても醒めても夢の中」、「醒めても夢の中」、「夢の中」という6通りの表現が重なり合っている。

⁶ 「記号短歌」は、1990年代に口語や記号などの修辭を推し進めた「ニューウェーブ」と呼ばれる作品群に特徴的な作品である。代表的な短歌として「言葉ではない！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！ ラン！」

(加藤治郎) が挙げられる。この短歌の作者でありニューウェーブの中心とされる加藤は、記号の使用が「ニューウェーブの最も特徴的なレトリックである」(加藤 2019: 123) と述べている。現代短歌における記号の使用を論じるにあたりニューウェーブの存在は無視できないが、ニューウェーブ歌人の歌集は絶版になっているものが多く、歌集を通読したうえで記号が関わるレトリックを分析することが現時点では困難であるため、今後の課題とする。

- (7) 姉の名を辞典で引けば 死後の世界。あの世。 と書かれていて愛おしい (水野葵以)
 (7') 姉の名を辞典で引けば「死後の世界。あの世。」と書かれていて愛おしい
 (筆者による改変)

(7) は 4.1.1 節にて分析した(2)と同じ連作のなかの一首である(注3を参照)。語り手が自身の姉の名を辞典で引き、そこに書かれた定義が空白とともに表記されている。辞書の定義の引用には(7')のように鉤括弧が使用されるはずであるが、(7)では鉤括弧ではなく空白が選択されている。この選択には、姉の名が「死後の世界。あの世。」を表す語と同じ音であることが関わっていると考える。例えば姉の名前の音が「よみ」だとする。「よみ」を辞典で引いたとき、この音の見出し語として「よみ【黄泉】」が目に入る⁷。実際に姉の名前が黄泉に由来しているわけではないとしても、同音の語に「死後の世界。あの世。」を意味するものがあることは不吉なように思われる。それを「愛おしい」と思う語り手は、姉の名前を通して姉にそのような名前をつけた両親に思いを馳せていると解釈できる。

辞典に書いていることを引用する場合には(7')のように鉤括弧が要求されるが、実際の辞典の紙面で語句の定義が鉤括弧で括られているわけではない。そのため、(7)は辞書の定義を引用しているというよりむしろ辞典の紙面のレイアウトをそのまま短歌に写し取っていると考えられる。ひとつの連作のなかでも、(2)が「ポケモンずかん」の形式を踏襲することでまだ幼い語り手が現実との距離を保っている一方、(7)は辞書の紙面という媒体を視覚的に立ち上がらせることでリアリティを生じさせている。そのリアリティは語り手が離婚した両親を自身に近い存在として位置づけ、「愛おしい」とまで思うようになるという精神の成熟を物語っている。

4.2 記号の形に基づくレトリック

4.1 節では、短歌作品のなかで現代日本語表記における記号使用の慣習に沿って記号を用いる、あるいは記号使用の慣習から逸脱することによるレトリック効果を観察した。しかし記号は常に特定の意味や用法と結びつくわけではなく、記号の形そのものが修辭的に働くこともある。

- (8) ^{大なり}> ^{小なり}< ^{イコール}= でもいい は奇跡みたいで怖くなるから (嶋田さくらこ)
 (8') 大なりでも小なりでもいいイコールは奇跡みたいで怖くなるから (筆者による改変)

(8) には、不等号(より大)、不等号(より小)、等号と3つの記号が使用されている。この短歌がその一部をなす連作「Moderato 少しくらい速くても遅くてもいい」は学生の恋愛を描いている。この一連には「関数」や「数式」といった語が見られる⁸が、恋愛をテーマにした連作のなかの短歌でもあるため、(8)において不等号や等号で結ばれるものとして想定されるのは、本来は数値化できない恋愛における互いの感情であると考えられる。2人が互いに向ける感情の度合いを数学の記号で結ばれるものとするすることで、語り手の学生という属性が活かされるほか、感情の大きさの度合いが視覚的に分かりやすい形式で示されている。不等号と等号の対比によって、お互いがお互いを同じだけ好きという「奇跡」はなくてよく、刻々と変化する人間の気持ちがぴったり一致することはむしろ恐ろしいという心情が表現されている。

(8')と比較すると、この短歌は形の対比によって、>や<とは異なり、=はつり合いが取れている状態であることが一目瞭然であり、それを「奇跡みたい」と呼ぶことに説得力がうまれている。さらに不等号の使用は初句と第二句の字余りとも関連し、>や<な関係における不均衡を際立たせている。

⁷ 『明鏡国語辞典(第三版)』で見出し語になっている「よみ」は、掲載順に「黄泉」と「読み」である。

⁸ 解釈の参考のため、(12)と特に関連すると筆者が判断した連作の一部を以下に引用する。

関係が滑らか過ぎるいつまでも関数みたいなわたしとあなた
 時間割にこっそり「デート」と書いておく(そのまま書き写すといいよ)
^{大なり}> ^{小なり}< ^{イコール}= でもいい は奇跡みたいで怖くなるから
 日溜まりに置いてみようか やわらかくなるまで待てば解ける数式

(9) 登校日 すべすべした手でかえされた MONO 消しゴムの O が● (伊舎堂仁)

(9') 登校日 すべすべした手でかえされた MONO 消しゴムのオーが黒丸

(筆者による改変)

(9) は、O と●を記号の形そのままに見て解釈することが要求される。語り手が登校日に消しゴムを返してもらったが、貸した相手が「MONO」の O を黒く塗りつぶして「M●N●」にしていたという場面が、「O が●」記号を用いて示されることで、情景がはっきりと浮かび上がる。「O と●」は視覚的な要素であるものの、下の句を「モノ消しゴムのオーが黒丸」と読むことで、31 音の定型に収まり、音韻の面でも記号が効果的に働いている。

また、消しゴムの O を黒く塗りつぶした人物の手についても描写し、それが「すべすべした手」であることにも着目したい。「すべすべした手」という上品さを感じさせる表現からは、育ちの良い、そんないたづらをしそうにはない人物像が想像される。そんな「すべすべした手」の持ち主が O を●に塗りつぶしているという、想像される人物像と実際の行動の対比によるおかしさもこの短歌の表現上の工夫である。

(10) 最高の笑顔のままで僕は二†五を享年として生きてゆく (岡野大嗣)

(10) は、「二†五」にダガーが用いられている。「享年」という語から、これは「二十五」のことではないかという推測が働き、実際に「二†五」を「にじゅうご」と読むことで、字余りはあるものの短歌の定型に収まる。ダガーを漢字の十に見立てるのは、「†」と「十」の視覚的類似性によるもので、注釈を示すというダガーの慣習的な用法からは逸脱している。そしてこの短歌におけるダガーは単に漢字の十の代わりをしているだけではない。ダガー (dagger) は短剣を表し、「享年」と響きあうことで、この短歌における死のイメージを視覚的に印象づける効果を挙げている。

(11) [運命のひと どこ] 見つからないことをブラウザの果て確かめている
る (千原こはぎ)

(12) [まもなく ツ\$MOU%Q"] 大きく揺れて駅へと入る (久石ソナ)

(12') 「まもなく ツ\$MOU%Q」 大きく揺れて駅へと入る

(筆者による改変)

ブラケットは、音声の表記や注を表すために使用される記号である。しかし (11)

(12) のブラケットはいずれもそのような用法で使用されたものではなく、画面に表示された文字を表している。(11) は、作中に「ブラウザ」とあるように、ブラケットが検索エンジンの検索窓の形を模しており、このようなブラケットの使用は SNS 上でも観察される。

(12) の引用は、紙面の都合で一部の文字の向きを変更している。実際の歌集での表記は画像 2 を参照されたい。(12) は故郷を離れた語り手が電車に乗っている場面⁹であり、ここで鉤括弧ではなくブラケットが使用されることで、これは車内アナウンスではなく行先を表示する車内の電光掲示板を表していることが明示される。この部分があえて横書きで書かれていることも、この解釈の

「まもなく ツ\$MOU%Q」 大きく揺れて駅へと入る

【画像 2】久石 (2021) p.14 より

根拠となる。「ツ\$MOU%Q」は意味をなさない文字列であるが、これは、マンガやテレビのテロップで不明瞭な音声や判読できない文字をランダムな記号で置き換えることと同様の記号の使用である。ここで判読できない文字列を表す「ツ\$MOU%Q」は、電車が「大きく揺れ」て読むことができなかった駅名、あるいは「まもなく」を読んだときは表示が日本語だったが、駅名にさし

⁹ (12) が収められている連作「ひかりはスローモーションのように」には、故郷を離れ新しい生活を始めようとする語り手の引っ越しまでの日々、新しい町での生活、望郷の念が詠まれている。

かかったときにはすでに外国語による表示に代わってしまい、語り手にとって解読不能な文字の羅列をランダムな記号に置き換えたものであると解釈できる。

(13) 最終版_修正_修正.doc 終わりって本当にあるんだ (上坂あゆ美)

(13)の「最終版_修正_修正.doc」は、Microsoft Word のファイル名を表している。Microsoft Word の拡張子とアンダーバーは、読み手の経験と結びつき Microsoft Word のファイル名の表示を想起させる効果をもつ。この短歌を単独で鑑賞すると、最終版と名前をつけた文書ファイルを二度修正し、ようやく完成を迎えたことへの語り手の安堵や感慨が感じられる。しかし連作「スナックはまゆう」では、(13)の前に「ばあちゃんの骨のつまみ方燃やし方 Youtuber に教えてもらう」「マスカラが目尻の皴についたまま献花の前でうつくしい母」の2首が配置されている。連作のコンテクストを踏まえると、Microsoft Word のファイルと人間である祖母の間に写像関係が生じ、「最終版」は老後を迎えた祖母、「修正」は怪我や病気の治療、「最終版_修正_修正.doc」は、二度の治療を経た祖母を表しているという解釈が可能になる¹⁰。するとここでの「終わり」は語り手の祖母の死を意味し、「終わりって本当にあるんだ」からは医療によって延命し、まだ生きることができるように思われた祖母の死を受け入れきれない語り手の心情を読み取ることができる。

(14) 黒板の前に散らばる粒子たち Don't t ru st over thirty.

(中山俊一)

(14)では、短歌の後半にかけて空白が多用されている。「黒板の前に散らばる粒子」とは黒板を消すときに舞うチョークの粉であり、短歌後半のアルファベットは黒板に書かれている英文の一部である。“over thirty”の単語の間の空白とそれ以外の空白のスペースの違いから、アルファベット部分は黒板が消されている途中の様子を表していることが分かる。全角2文字あるいは3文字分の空白は、黒板の文字の既に消えてしまった部分に対応している。この空白によって、黒板に書かれた英文が消されている様子が視覚的に明示されている。それと同時に、まだ残っているアルファベットをつなぎ合わせると“Don't trust over thirty.”とひとつの英文が完成する。この英文を「ドント トラスト オーバー サーティ」と読んだとき、上の句の五七五を合わせて31音になり、短歌の定型が完成する。一部が消された英文のなかに別の新たな一文を見出すことにこの短歌の面白さがあり、(14)における空白は、語り手による偶然の発見を短歌として切り取ることに貢献している。

5. おわりに

本稿では、「新鋭短歌シリーズ」に収録された短歌作品のうち記号が使用されたものをいくつか取り上げ、記号の使用による現代短歌のレトリックを考察した。まとめると、現代短歌における記号の使用には、①記号の用法に基づいて作中世界を立体的に想像させる効果、②視覚に強く訴え、作中世界を視覚的にイメージさせる効果、③作中の語や韻律と響きあい、作品の主題やレトリックを強化する効果、④読者の経験と結び付き、特定の解釈を喚起する効果があると考えられる。本稿では記号の慣習的な用法を利用して短歌ならではの表現効果を挙げているものと、記号の用法よりも記号の形が解釈に影響を及ぼすものを分けて分析したが、前提として記号は視覚に訴えるものであり、(3)のようにこの分類にまたがる短歌ももちろん存在する。例外はあるものの、記号を使用した短歌のほとんどは31音の定型から大きく逸脱することはなく、記号の使用は韻律の面では定型を守りながらその形式を創造的なものにしようとする試み¹¹であると言える。

最後に本稿の限界と今後の展望を述べる。「新鋭短歌シリーズ」は現代短歌を構成する一部にすぎず、また本稿は「新鋭短歌シリーズ」について網羅的に記述したわけではないため、現代短歌における記号とレトリックというテーマのごく限定された範囲に言及したにすぎない。このテーマについて十分に論じるためには、ニューウェーブ（注5を参照）を含むより幅広い年代の短歌

¹⁰ この解釈は、大森文子先生のご指摘に基づく。

¹¹ 2025年2月21日に開催された言語文化レトリック研究会第126回における、中嶋浩貴先生からのコメントに基づく。

を取り上げる必要がある。それぞれの短歌作品のより詳細な分析と、記号がもたらすレトリック効果の相互の関連について分析を深めることも今後の課題である。さらに本稿が対象としている短歌は定型をもつ短詩であるが、詩における言語使用は日常の言語使用と切り離されたものではなく、むしろその延長にある。そのため、現代短歌のなかで表記がもたらすレトリック効果を分析することを通じて、現代日本語の表記意識についても考察を行いたい。

参考文献

- 大野道夫（2008）「現代短歌の修辞とその背景——会話体・記号、リフレイン、直喩、マンガ的レトリックを考察する——」、『日本現代詩歌研究』第8巻、pp.15-28、日本現代詩歌文学館。
梶智紀・水城よしの（1995）「記号の歌」、『短歌人』第57巻第5号、pp.46-47、短歌人会。
加藤治郎（2005）『短歌レトリック入門』、風媒社。
加藤治郎（2019）「ニューウェーブの中心と周縁」、『短歌研究』第88巻第6号、pp.120-128、国宝社。
三枝浩樹（1981）「文字でないもの 短歌における記号的なものの効用について」、『短歌研究』第38巻第8号、pp.38-40、国宝社。
高良真実（2024）『はじめての近現代短歌史』、草思社。
松平盟子（2005）「記号符だって活用できる」『短歌』第52巻第5号、pp.134-137、角川書店。

辞書類

- 岡井隆〔監修〕（1999）『岩波現代短歌辞典』、岩波書店。
北原保雄〔編〕（2020）『明鏡国語辞典（第三版）』、大修館書店。
小学館辞典編集部〔編〕（2007）『句読点、記号符号活用辞典。』、小学館。
中村明・佐久間まゆみ・高橋みどり・十重田裕一・半沢幹一・宗像和重〔編注〕（2011）『日本語文章・文体・表現事典（新装版）』、朝倉書店。

短歌作品出典

- 蒼井杏（2016）『瀬戸際レモン』、書肆侃侃房。
伊舎堂仁（2014）『トントングラム』、書肆侃侃房。
上坂あゆ美（2022）『老人ホームで死ぬほどモテたい』、書肆侃侃房。
岡野大嗣（2013）『サイレンと犀』、書肆侃侃房。
小野田光（2018）『蝶は地下鉄を抜けて』、書肆侃侃房。
嶋田さくらこ（2013）『やさしいぴあの』、書肆侃侃房。
千原こはぎ（2018）『ちるとしふと』、書肆侃侃房。
中山俊一（2016）『水銀飛行』、書肆侃侃房。
久石ソナ（2021）『サウンドスケープに飛び乗って』、書肆侃侃房。
水野葵以（2022）『ショート・ショート・ヘアー』、書肆侃侃房。